

ごあいさつ



社団法人 日本 WHO 協会
理事長 関 淳一

去る9月15日に大阪国際会議場（グランキューブ大阪）に於いて、私共日本 WHO 協会主催のもとに開催されたフォーラム「WHOと日本」は、演者にも恵まれ成功裡に終えることができました。開催に当り御協賛いただいた企業は素より御尽力いただいた多くの関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

フォーラムでの、WHO 健康開発総合研究センター（通称神戸センター）所長の Dr. Jacob Kumaresan による「都市化と健康」と題する講演は、正にフォーラムの主題「WHOと日本」にふさわしい内容でした。

Kumaresan 所長は、世界中の全ての人々が健康でありたいと望んでいる中で、WHO憲章の精神を踏まえ、現在世界中で進行している都市化とそれに伴う健康の問題について極めて分かり易く講演されました。

初めは語りかける様に、そしてその後は現状のデータとそれに基づく将来予測について論理的に話を進められ、神戸センターが中心になって研究を進めておられ、且つ今年の WHO のテーマでもある「進行する都市化と健康」のもつ意味を多くの聴衆が理解できたのではないかと思います。

WHO 本部（ジュネーブ）や WHO 西太平洋事務局（マニラ）などで豊富な経験を積まれ、現在東京女子医科大学教授をされている遠藤弘良先生の「WHO が期待する人材」と題する御講演では、先生御自身の御経験も踏まえ乍ら、WHO の行っている非常に幅広い活動について、多くの写真も用いて話を進められ、WHO 全体の仕組みと其中での日本人の活動の過去、現在について分かり易く話されました。そして今後の日本の課題として、人的貢献の重要性について強調されました。また、Kumaresan 所長も触れられましたが、遠藤教授も、WHO が制度として行っているインターンシップについても言及されましたが、聴衆の大部分の方々にとっては初めての話題だったのではないかと思います。

「WHO への人的貢献を進めるために」と題して行われたパネルディスカッションでは、遠藤弘良教授とサクラレパス・サクラミュージアム清水靖子主任学芸員、更に当協会理事でもある大阪大学大学院人間科学研究科の中村安秀教授が進行役的立場で加われ、各々の方々から御意見発表後、フロワーの一般の方々からの御質問や聴衆の中に保健・医療の分野での国際協力の経験を有しておられる専門家や大学教授の方々もおられ、それらの方々からの御発言等活発な意見交換が行われました。

私は、その中で、企業の社会貢献のあり方も、各々の企業による工夫や考え方により、近年極めて多様化、進化してきていることが浮彫りにされた様に思いました。

会場には、かなりの海外から日本へ留学中の学生さん達や保健医療あるいは国際協力に関心のある日本の学生さん達も来られており、フォーラム後の交流会でも Kumaresan 所長をはじめ演者の方々に色々質問したり、お互い初対面同士で意見交換などされている場面が見られました。

「この様なよき会をこれからも、特に若い人達に是非」というフロワーからの御発言は、主催者の私達に大きな示唆を与えて下さった様に感じました。

私共日本 WHO 協会も、9 月のフォーラムで得た様々な経験や皆様からいただいた御意見を、協会の将来の発展に生かしていきたいと心を新たにしております。

2010年10月